

第48回 福岡県地方史研究協議大会

福岡県の近世城郭3 豊前の部

主催 福岡県教育委員会
共催 福岡県地方史研究連絡協議会（福史連）
期日 平成26年6月28日（土）
会場 福岡県立図書館レクチャールーム（本館地下1階）
日程

13:00 開 会

◆主催者あいさつ

◆福史連会長あいさつ

13:10 講 演（60分）

「城郭研究からみる小倉城」

講 師 中西 義昌 氏

14:10 休 憩（20分）

14:30 講 演（60分）

「中津城

—黒田官兵衛時代の姿はどこまで追えるのか—」

講 師 木島 孝之 氏

15:30 質疑・応答

16:00 閉 会

講師プロフィール

◎ 中西 義昌 氏

現 職	北九州市立自然史・歴史博物館 学芸員
専 門	城郭史、建築史
研究テーマ	城郭跡からみた戦国・織豊期の研究 建築史研究の資料論とその実践
主な著作	共著 『歴史史料としての戦国期城郭』（岡寺 良氏と共著）花書院 2001年 論文 ・「戦国期城郭にみる大友氏の軍事体制～縄張り研究に基づく大友氏領国の基礎研究～」 （『城館史科学』創刊号 2003年） ・「中・近世城郭の構造分析と城郭跡の保存・整備―城館史科学の視点から―」 （『日本歴史』第752号 2011年）

◎ 木島 孝之 氏

現 職	九州大学大学院人間環境学研究院都市建築学部門 助教
専 門	日本城郭史・日本建築史
研究テーマ	城郭の縄張り構造と領主権力の相関
主な著作	・『城郭の縄張り構造と大名権力』九州大学出版会 2001年 ・「近世初頭期博多における再編の実態とその歴史的意味―「房州堀」の構築時期・主体の再検証を通して」（『日本建築学会計画系論文集』第550号 2001年） ・「筑前立花山城跡が語る朝鮮出兵への道程―小早川隆景による立花山城の大改修の実態とその史的意味」（『城館史科学』創刊号 城館史科学会 2003年） ・「唐津焼創始時期-1580年代説-を問う―岸嶽城の縄張り構造の解明を通して」（『韓国の倭城と壬辰倭乱』岩田書院 2004年） ・「栗山大膳の福岡城内自邸引籠り事件が語る寛永期社会の一実相―黒田騒動にみる伝統的武家理念「自力・私戦」の行方」（『中世城郭研究』第21号 中世城郭研究会 2007年） ・「角牟礼城高石垣-毛利高政期構築説を問う」（『城館史科学』第6号 2008年）

城郭研究からみる豊前小倉城

北九州市立自然史・歴史博物館
(城郭談話会会員) 中西 義昌

1. 城郭研究の進展と近世城郭

■福岡県……江戸時代には、国持大名クラスの城主が入部し巨大な居城を築く。また、黒田六端城に代表されるように領内には支城も多数築かれた。

豊前国（大分県側も含む）

小倉城：1602年（慶長7） 細川忠興が大改修

細川領の支城…門司城、香春鬼ヶ城、岩石城など

※中津城：1587年（天正15）黒田孝高の新規築城→1600年（慶長5）細川忠興が改修

筑前国 福岡城：1600年（慶長5） 黒田長政の新規築城

黒田六端城…黒崎城、若松城（消滅）、鷹取城、益富城、麻天良城、松尾城

筑後国 柳川城：1600年（慶長5） 田中吉政の大改修

久留米城：田中氏の支城を経て、1620年（元和6）有馬豊氏の大改修

田中領の支城…福島城、猫尾城など

周辺地域でも、熊本城や佐賀城、唐津城、府内城など居城クラスの城郭が同時期に一斉に築城・改修された。

- 福岡県内は近世の城郭遺跡が数多く分布するにもかかわらず、長らく近世の城郭遺跡は保全する対象として関心が集まらなかった。小倉城跡では、広範囲の発掘調査と引き換えに多くの埋蔵遺構が公共事業で破壊される結果となった。
- 近年になって、中・近世の城郭遺跡は、ようやく整備を前提とした発掘調査や城館の悉皆調査事業が進められるようになった。しかしながら、福岡城のように観光目的の復元論議が続くなど、学術的には城郭遺跡を取り巻く環境は改善されていない。

■ 城郭研究の研究史

福岡県に限らず、城郭研究は長らく低迷してきたが、1979年に村田修三が縄張り研究を提唱、これ以降、「進化論的型式学と権力論の追求により、城郭遺跡を歴史研究の資料として読み解き活用する」縄張り研究が自立した学問領域としての城郭研究を牽引してきた【図1】。

- 縄張り研究……城郭遺跡の現地調査から縄張り構造に着目し、縄張り図を作成し進化論的形式学の視点などの考古学的手法を用いて縄張りを分析する。そして、得られた見地をもとに様々な史料を勘案して歴史研究を行う城郭研究の一手法。

※「進化論的形式学」の考え方

同じ時代・文化圏・権力体・地域の枠の中で技巧的なプランを持つ城郭を相対的に新しいとみる考え方。無論、古い型式が再生産されるのは一向に構わない。考古学では一般的に行われている遺物や遺跡の変遷をメカニズムとして分析するための手法。

- 織豊系城郭虎口変遷案と近世城郭研究

戦国期城郭から近世城郭への変遷について、千田嘉博と木島孝之が、織田・豊臣政権に属した勢力が築いた城郭遺跡（織豊系城郭）の虎口プランに着目し発達モデルを導いた。このことがその後の織豊期・近世城郭研究の進展につながった。

◇千田嘉博・木島孝之の「織豊系虎口変遷案」

千田・木島両氏は、織田・豊臣政権に属した勢力が築いた城郭遺跡の中で、嘴状外柵形虎口（L字型の「腕」を城外側に振り出した形を持つ）とその背後に付随する虎口空間の関係に着目し個別事例を規定する諸要素を思い切って間引くことで、考古学の遺物編年研究で用いられる進化論的形式学の手法を応用して、両者の組み合わせから成る発達モデルを示した。この織豊系城郭の発達モデルを織田・豊臣政権の天下統一から徳川幕藩体制へ移行する社会の変化と関連付けたことで、同時代の城郭遺跡の史的活用を可能とした。さらに、木島孝之が内・外柵形虎口を形づくるL字形の「腕」の組み合わせと虎口内の通路空間の拡充（小空間化→小曲輪化→曲輪化）の関係に読み直し、千田の変遷案を補完した【図2】。

※織豊系城郭……柵形虎口や石垣など近世城郭につながる高度な築城技術（織豊系縄張り技術）を採用し、主郭（本丸）への求心性を追求する曲輪配置と一体的かつ有機的に絡み合い連携を保つように使用する。高度な築城技術の使用と主郭（本丸）への求心性の追求が一体の関係にある。

織豊系城郭の発達と全国への波及が織田・豊臣政権の天下統一過程と連動することから、城郭遺跡から権力論を読み解く視点が得られた。これを応用する形で、木島孝之は、高度な織豊系縄張り技術を用いた豊臣系新興大名に対して、旧族取立大名・旧族居付大名らは国元では在地社会の制約を受けていびつな受容形態を示す「亜流の織豊系城郭」を築いたことを明らかにした。

→近世の城郭遺跡から地域論を読み解く視点が得られた。

■ 城館考古学と縄張り研究

○近世城郭の特徴

- 強力な遮断施設……高石垣や大土塁・大堀など、塁線の処理には横矢掛りを採用。
- 技巧的な虎口プラン……柵形虎口・食違い虎口・馬出しなど織豊系虎口プランを採用。
- 高度な石垣技術……高石垣に算木積み・割肌石・鏡石などを使用。
- 礎石・瓦葺建物の採用……建物には、礎石や畿内系瓦、塗籠壁、多重櫓などを用いる。

城郭遺跡の中でも、近世城郭は石垣や瓦、天守・櫓などの礎石建物に目がいきやすい傾向がある。

1990年代以後、城郭遺跡の発掘調査の増加に伴い、石垣や瓦・礎石建物などの検出遺構に着目した城館考古学の議論が進展した。しかしながら、そこでの議論は、城郭遺跡の構成要素（石垣、瓦、礎石建物、天守など）毎に、発掘調査での個別事例紹介に留まる。本来なら、上部構築物の性格は、基礎部分の形態や防御の仕組み・築城主体の性格を反映した縄張り構造の検討が欠かせない。例えるならば、縄張り構造はパソコンで言うところの「OS」のようなものであり、個々の構成要素はOS上の「アプリケーション」に例えられる。これからの城館考古学は縄張り研究と史科学の視点を持つことでより深化できるだろう。

2. 小倉城の概要とその変遷

■ 豊前小倉城の概要

○小倉津……紫川、板櫃川の河口に開けた港湾。背後に勝山と呼ばれる低丘陵が位置する。

板櫃川沿いに到津荘・到津八幡宮があり、中世は宇佐神宮との関係が深い。

砂丘部分では、鋳物師などの活動が確認される。(小倉城二の丸家老屋敷跡)

1) 戦国期の小倉城①……毛利氏の築城

→「宗像社辺津宮第一宮御宝殿置札」には、九州渡海を進める毛利勢が1569年(永禄12)に通路となる小倉津に築城とし、南条勘兵衛らを在番させたとする。これが史料上の初出。

※毛利氏は、対大友氏の筑前攻めルートを小倉から芦屋・植木(遠賀川沿い)で設定。

2) 戦国期の小倉城②……高橋鑑種・元種の居城。

翌年、大友氏に降伏した宝満城主高橋鑑種が豊前国規矩郡に転封。鑑種入部に際し、大友方が小倉津の後背地にあたる鷲岳(蒲生・篠崎)に築城したとある。一方、「島津家久上京日記」では小倉津に「高橋殿の館」があったことが記されている。

→鑑種の養子、高橋元種は天正中・後期に反大友方を鮮明にし、香春城を拠点に豊前北部を席卷する。

元種は、実家の秋月種實・種長とともに1586年(天正14)には豊臣秀吉の九州出兵に対立姿勢を採る。10月4日に黒田孝高と毛利勢の急襲を受け小倉城は落城(「麻生文書」)。この段階では勝山丘陵に城郭施設が整備されていたと見られる。

3) 豊臣政権期の小倉城……毛利(森)勝信・勝永の居城

1587年(天正15)秀吉の九州国分けにより、豊前国規矩・田河郡は高橋元種に替わり森吉成(毛利勝信)が入部する。小倉城を居城、香春城を支城とする。但し、毛利(森)時代の様相は不明。

4) 関ヶ原戦以後の小倉城……細川忠興の居城

1600年(慶長5)12月に細川忠興が丹後国から加増転封。当初は中津城を居城とし、小倉城には弟の細川興元を支城主とする。翌年に興元は出奔、代わりに忠興が中津城から居城を移す。1602年(慶長7)1月から大改修を施し同年11月に入城(「綿考輯録」)。1612(慶長17)年頃の毛利氏側による探索書「豊前国小倉城図」(山口県文書館) [図3] では近世段階の小倉城 [図4] とほぼ変わらない姿となっており、この時期までに主郭部はおおよそ普請が終わっていたと思われる。

5) 近代以降の小倉城

近代に鎮台や砲兵工廠など軍事施設、八坂神社敷地として使用されたため、石垣などに積み直しが多く見られる。戦後、御蔵部分には市役所・議会棟が建てられた。さらに、1990年代後半には、勝山公園整備により、二の丸、下屋敷・御厩・御蔵、船蔵・御米蔵、新馬場・御花島と主要部の大半が破壊された。その代わりに広範囲の発掘調査が実施され、石垣や瓦、礎石跡などを伴う多くの遺構が検出された。

3. 小倉城の縄張り構造

■ 毛利氏・高橋氏段階の縄張り……不明

■ 毛利(森)氏段階の縄張り

これまでの発掘調査では、毛利(森)氏以前の遺構は主郭部の西側にあたる新馬場・御花島跡で横堀・土塁遺構が、紫川に面した御厩跡の発掘において石垣(『小倉城跡2』石垣28・29 [図5]) が確認された程度に留まる。それらの状況から類推して、毛利(森)氏段階の小倉城は主郭部を石垣で固め、周囲は土塁と横堀で遮断する程度と見られる。

※但し、御花島跡の横堀・土塁遺構は、箱堀であることから毛利(森)氏段階の可能性が高いが、天正中・後期の高橋氏段階の可能性も考えられる。

◇御厩跡・下屋敷跡の石垣評価について

報告書『小倉城跡2』では、御厩跡の最下層で検出された石垣28・29を永禄12年の毛利氏段階と評価する見解を示す。しかしながら、『小倉城跡2』をみる限り、石垣28・29は野面積みの石垣が直線的に仕上げられたものであり隅角部に算木積みも確認される。また、石垣の裏には礫を敷き詰める等の地盤強化の地業の跡が検出された。これらの技術は戦国期の在り系城郭技術には管見の限り見られない。形式学的にみて、石垣28・29は少なくとも毛利(森)氏以後の織豊系築城技術によるものと言わざるを得ない。

一方、同報告書では、石垣28・29の上層にあたる石垣22～26〔図6〕については、報告書では毛利(森)氏段階と細川氏段階説とする両論併記となっている。しかしながら、石垣22～26の層位が細川氏段階の遺構面と重なっていること、石垣22の築石の裏込めから毛利(森)氏段階の金箔瓦〔図7〕が出土していること、加えて、肥前名護屋城よりも福岡城の初期石垣が形式的には古式である様相が知られているように、慶長期の築城ラッシュ時には新旧の織豊系石垣技術が混在し見極めが難しいこと、これらのことを総合的に勘案して、石垣22～26は細川氏段階説(或いは限りなく毛利(森)氏最終段階)とするのが妥当と思われる。よって、それより下層にある石垣28・29が毛利(森)氏段階で評価すべきだと考える。

◇豊臣政権期の諸大名の居城

- ・関ヶ原戦以前・朝鮮出兵並行期の国持大名以上の豊臣大名の居城
→豊臣氏一門(大坂城・伏見城・肥前名護屋城・聚楽第)をのぞけば、八カ国の大封大名毛利氏の広島城、三カ国の宇喜多氏の岡山城、そして筑前国等の小早川氏の名島城など大封大名の居城をみても、相対的に見劣りする規模に留まる。
- ・数万石規模の吏僚系大名の居城をみると、日隈城(毛利高政)、安岐城(熊谷氏)、富来城(寛氏)など主郭部のみ石垣で固めた程度のもが多い。
→おそらく毛利(森)氏段階の豊前小倉城も後者に近いと考えられる。

■細川氏大改修後の縄張り①主要部 〔図8〕

各曲輪は高石垣で直線的に仕上げられた墨線と横堀で区画される。墨線には横矢掛りが施され、天守、多重櫓・多聞櫓など塗籠め式の礎石建物が要所に築かれる。一見すると曲輪と水堀が入り組んだ複雑な迷路のように映る。地形条件を巧みに利用した「名将の築城術」と称賛する向きもあるかもしれない。

しかし、縄張り構造を読み解くと、異なる様相が見えてくる。

- ・主郭(本丸と松の丸に分かれる)を起点に、織豊系城郭の虎口プランである馬出しを大手門・西の口門・多聞口門の三方向に採用。
→三方向の馬出しは、外側にさらに連続して馬出しを重ねる「重ね馬出し」の技法が見られる。それを繰り返すことで、個々の馬出しが連鎖して主郭の外周部にリング上につながる。
- ・小倉城では、慶長期の居城クラスの巨大化に伴い、元々は城門の前面に配置された「出撃用の緩衝空間」だった馬出しが肥大化する。内部に大身家臣の屋敷地や御蔵を含むなど一般曲輪と変わらなくなる。
→元々、枳形虎口や馬出しの通路部分や溜まりの空間だったものが肥大化し、一般曲輪化し下位曲輪を創出する方向へ発達する。小倉城ではそれらの曲輪に横矢を掛けようとするため、複雑な墨線となる。

※同時期には、柳川城などのように、巨大な空堀と高石垣の遮断機能を期待し、横矢掛かりが形骸化し直線的な墨線で仕上げられるものも見られる。

- ・元々、馬出しでは城内からの出撃を意図するため通路は平入りになる。しかしながら、溜まり空間が肥大化し一般曲輪化した小倉城では、本来平入りになるはずの通路部分(大手門・西の口門・多聞口門・虎

の門)に桁形虎口が設置される。

■馬出しの発達モデルにみる小倉城の縄張り [図8]

- ・ 本来は出撃を意識した虎口である馬出しを重ねて下位曲輪を創出する築城技術は、織豊系城郭の発達モデルのひとつである[図2 B系統]。馬出しは沓掛城 [図9] や玄蕃尾城 [図10] など横堀を伴う平地・丘陵上の城郭の虎口プランとして多用される。その後、国持大名の居城などでも会津若松城 [図11]、大和郡山城など重ね馬出しや連鎖状のリングを創出するなどの発達を続ける。その発達モデルの延長上に小倉城がある。
- ・ 小倉城は「馬出しの一般曲輪化」という当時最新の築城技術の発達動向を取り込んだ縄張り構造を持つ。また、「重ね馬出しと連鎖してつながる」様相は、同時期に田中吉政が改修した筑後柳川城 [図12] や竹中重利が整備した豊後府内城などに見受けられる。

→細川氏が最新の織豊系の築城技術を使いこなす豊臣系新興大名の一員だったことを裏付ける。

※もうひとつの系譜 [図2 A系統] では、「連続桁形虎口と通路空間の一般曲輪化」が起こり、黒田氏支城の苅田松山城や、加藤清正の熊本城、黒田長政の福岡城などの縄張り技術に展開する。

A：連続外柵形虎口が下位曲輪を創出するモデル

→福岡城（黒田氏居城）、苅田松山城（黒田氏支城）、熊本城（加藤氏居城）や津山城（森氏居城）など

B：重ね馬出し、或いは重ね馬出しがリング状につながり下位曲輪を創出するモデル

→中津城・小倉城（細川氏）、柳川城（田中氏）、久留米城（田中氏→有馬氏）、府内城（竹中氏）

このように、A・B両系統をみても、豊臣系新興大名なら、みんな「築城の名手」と言える状況。彼らにとっては、使いこなして当たり前前の軍事的素養だったことがわかる

＝豊臣政権の軍事エリートで共有された高度な築城技術の使用

■ 細川氏大改修後の縄張り② 周辺部 [図4]

海岸・河口部と主要な城門の周囲は石垣で塁線を固める。それ以外は大土塁と横堀による大規模な総構が城下を囲繞する。

- ・ 北側の二の丸や三の丸など複数の土分屋敷が並ぶ曲輪も、既に原形が失われつつあるが、重ね馬出しを外部に繰り返して形成されたもの。

※紫川河口より西側では、細川氏と大身家臣が入る小倉城主要部を中核に、総構により城外の村と城下（武家地・町屋）が明確に分けられる。城下は武家地の外側にあたる海岸部や長崎街道沿いに町屋が割り当てられた。また、東側の高浜地区には、総構で囲繞された大きな町屋地区が設定された。

- ・ 横堀と大土塁で囲まれた総構により、明確に村と町、そして町と武家地、さらに、大名当主・大身家臣と一般家臣で目に見える形で空間が仕切られている。土木構築物による明確な「兵農分離」の実態。

＝大名当主を頂点とする主郭（本丸）への求心性の追求。

豊前小倉城の縄張りは、近世城郭が、まさに高度な築城技術の使用と主郭（本丸）への求心性の追求が一体の関係にあることを如実に示す事例。

■小倉城の天守

- ・ 天守は1837（天保8）年に焼失。もともとは層塔型天守。最も重要な要衝を抑える城主や大名当主の多重櫓が大型化しシンボル化したものが天守と呼ばれる。
- ・ 小倉城の天守は馬出し曲輪（御厩・下屋敷）を抑える橋頭堡として機能する。地形の制約から東側に続櫓で

張り出すかたちを採る。豊前小倉城天守が単なる「みせる」役割ではないことは縄張りからも明らか。

4. 細川氏の本城・支城体制の変遷にみる慶長期社会の様相

1) 丹後時代と豊前時代の細川氏の本城・支城体制

細川藤孝・忠興：山城西岡（勝龍寺城）→丹後一国（田辺城・宮津城を居城）→（関ヶ原戦）

→豊前一国・豊後国速見郡（中津城・小倉城を居城） ※豊臣政権時代から一貫して国持大名。

■丹後時代の細川氏の本城・支城体制

○居城……田辺城（細川藤孝）、宮津城 [図13] ・宮津八幡山城（細川忠興）

○居城の田辺城・宮津城は関ヶ原後も使用されており、細川時代の様相は不明な点が多い。

縄張りからは、既に主郭を起点に重ね馬出しと馬出し空間の一般曲輪化の傾向が見て取れる。

○当初入部した宮津八幡山城は、戦国期の在り系城郭にほとんど手を加えないまま使用。

○支城……峰山（吉原山）城、久美浜城、安良城 [図14]、石川城

○部分的に改修が確認されるか、戦国期の在り系城郭に殆ど手を加えないまま使用。

■豊前時代の細川氏の本城・支城体制

○居城 ○中津城（細川忠利→忠興） 黒田氏の居城を継承し大改修。

・各曲輪は石垣墨線と水堀による厳重な遮断線を備える。

・主郭を起点に馬出しが肥大化した下位曲輪を連ねることで縄張りが構成される。

・山国川に面して土塁+空堀の外郭ラインで城下を圍繞する。

○小倉城（細川忠興→忠利） 毛利（森）氏の居城を継承し大改修したもの。

※すでに検討した通り。

○主な支城 ○岩石城……飯河氏、のち番城

→岩盤状の城域を石垣ラインによりコンパクトに整理する、平入り虎口を用いる。

○一戸城 [図15] ……荒川勝兵衛

→織豊系縄張り技術による大規模な改修を受ける。出撃性の高い虎口を用い、街道を封鎖する防塁型ラインを設定。

○門司城……沼田勘解由

→関門海峡を見下ろす山上は石垣で固め、瓦葺き建物も存在した。

2) 慶長の築城ラッシュと本城・支城体制

丹後・豊前時代の本城・支城の比較検討を通して、関ヶ原戦以後、慶長期には城郭の規模も縄張り技術もグレードアップしたことがわかる。

丹後時代の田辺城・宮津城 → 豊前時代の中津城・小倉城

居城は、より大きな規模で、かつ、高度な縄張り技術を積極的に採用、主郭への求心性を著しく高めた居城を創出。→支城レベルでも、居城のグレードアップに伴い、柵形虎口や石垣墨線など技巧的な織豊系の築城技術がコンパクトな形で採用される。

■近世初頭の城郭遺跡からみる慶長期築城ラッシュの実態

① 細川氏は朝鮮出兵・関ヶ原戦を経て、疲弊のどん底どころか、倭城併行期よりもさらに大規模な物量を投下し、最新の織豊系の築城技術を駆使した本城（小倉城・中津城）と、織豊系の築城技術により整備され

た支城を複数配置するなど、積極的な城郭普請を進めたことが確認できる。積極的な城郭普請と軍事体制を支えるだけの領国内の調達体制も整備されていたことを窺わせる。

- ② 同様の傾向は、豊前国→筑前国に転封した黒田氏の福岡城や鷹取城・黒崎城などの六端城をはじめ、西国の豊臣系新興大名に共通した特徴。この他、日出城（木下氏）や津和野城（亀井氏）など中小規模の大名でも最新の織豊系の築城技術を駆使した居城が築かれた。

①②から、朝鮮出兵後の内戦（関ヶ原戦）を経たにも関わらず、慶長前期の西国の諸大名は大小を問わず、領内に積極的に本城・支城を普請した。この時期に築城技術や城域の規模、普請に投下された物量は急速に進化する。それを支える領国内の調達体制が構築されていたことが確認される。

↓

朝鮮出兵の7年間で急速に進展した軍事動員体制は秀吉の死去により崩壊したとは言い難い。

むしろそのシステムのもとで戦役遂行した経験を持ち帰った諸大名を中心に、豊臣政権の国内統一戦で進められてきた「織豊化」（統一政権への服属と国分け以降の豊臣大名化のノルマ）がさらに深化し、際限なき軍役に応じた軍事動員（城郭普請）とそれを可能とする供給体制（＝近世武家社会）が進展したと考えられるのではないだろうか。

小倉城をはじめとする関ヶ原戦後の慶長・元和期の築城ラッシュは、朝鮮出兵で培われた軍役を支える物資供給体制が西国諸大名を中心に具現化したものと評価できる。

以上のように、小倉城を検証する際には、同時代の城郭史の大きな枠組みを踏まえたうえで個別事例の検証を行うことが重要。→城郭遺跡は同時代社会の様相を読み解く有効な「物証」となる。

[参考文献]

木島孝之『城郭の縄張り構造と大名権力』（九州大学出版会、2001年）

木島孝之「九州にとって「織豊」とは」[『海路』第11号（海鳥社、2013年）]

木島孝之「〈学界展望〉城郭研究-「縄張り研究」の独自性を如何に構築するか-

（『建築史学』第59号、2011年）

千田嘉博『織豊系城郭の形成』（東京大学出版会、2000年）

谷口俊治・川上秀秋編『小倉城跡2』[（財）北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室、1997年]

中西義昌「豊臣政権下の国内城郭と倭城—城郭遺構からみた朝鮮出兵と豊臣政権—」

[『倭城研究シンポジウムⅡ、倭城 本邦・朝鮮国にとって倭城とは』（2011年）]

表 II-1 織豊系城郭編年表

Ⅰ期 ~1559	Ⅱ期 1560 ~1566	Ⅲ期 1567 ~1575	Ⅳ期 1576~1582	Ⅴ期 1583~
A 1	2	3	4A 5A1	5A2(1592~)
B			4B1 4B2	5B1 5B2(1584~) 5B3(1609~)

↑ 織豊系城郭編年表 (千田嘉博)
 ↓ 織豊系城郭虎口変遷案 (木島孝之)

図1 縄張りの概念図

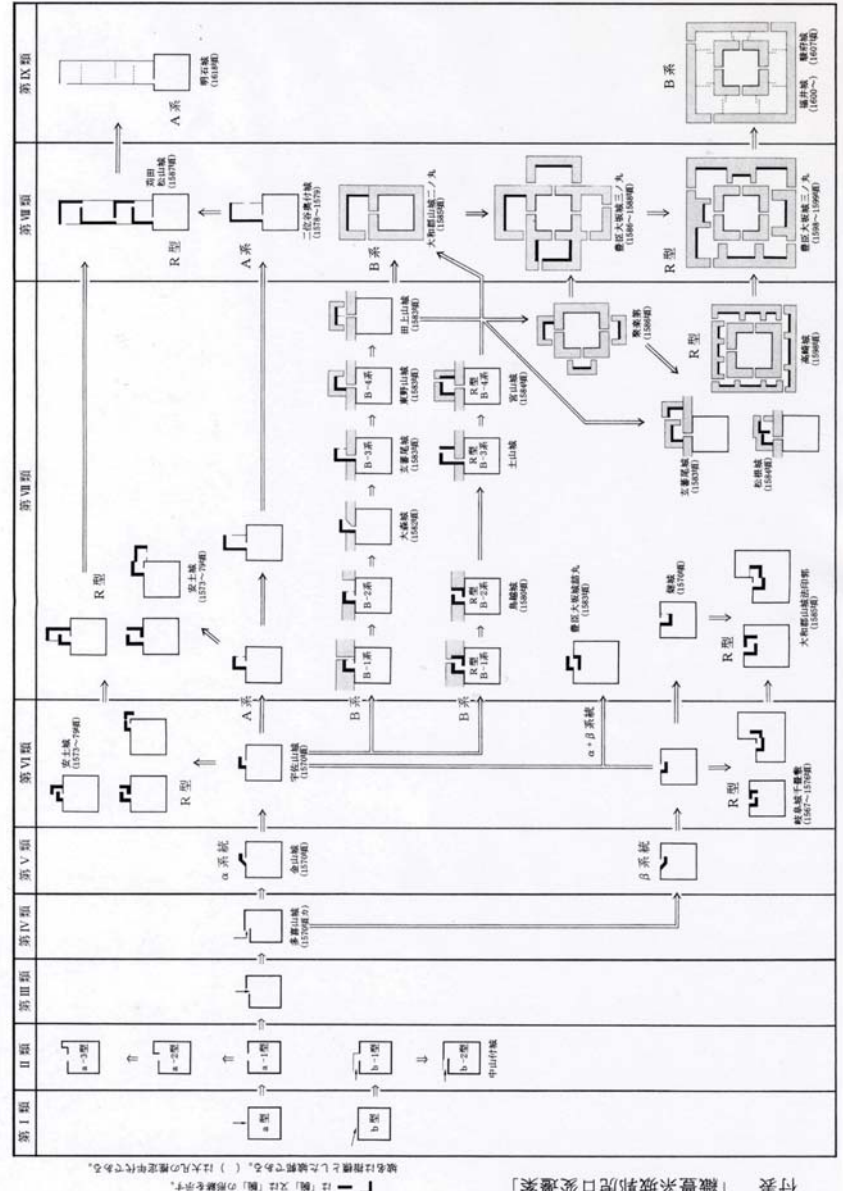
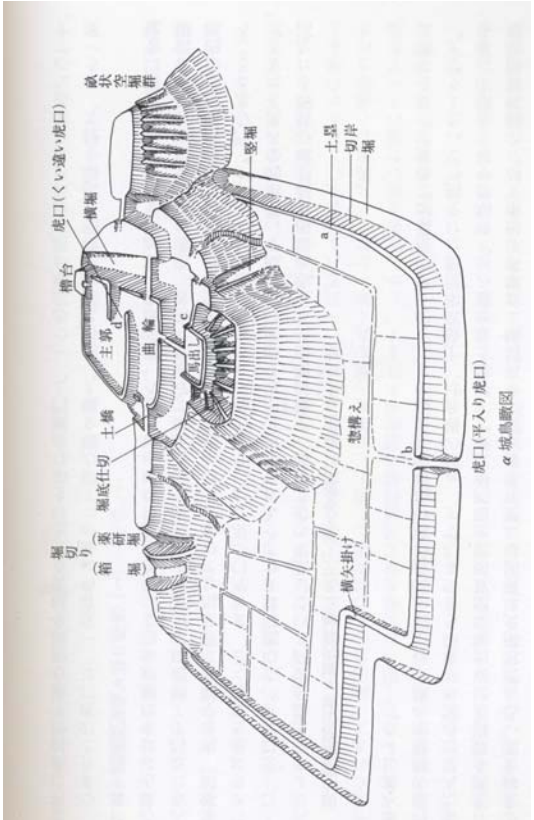
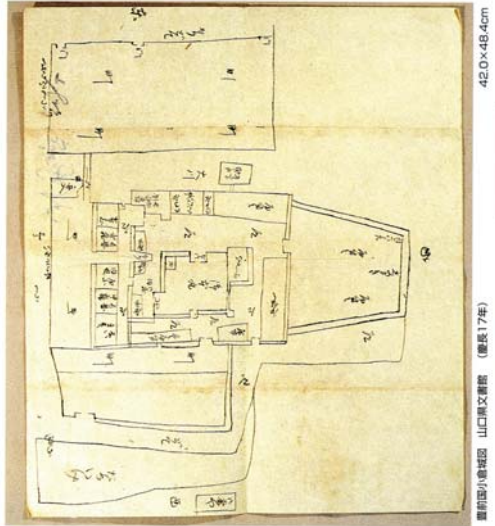


図2 千田嘉博・木島孝之の織豊系虎口変遷案



豊前小倉城図 山口県文書館 (慶長17年) 42.0x48.4cm

図3 豊前国小倉城図
慶長17年頃 山口県文書館 所蔵



豊前小倉城図

図4 豊前小倉城図 (内閣文庫正保城絵図)



第6図 石積み(石垣28)



第7図 石垣28と遺構群



第8図 石垣28北半部



第9図 石垣28南半部

↑石垣28

←石垣29



第10図 石垣29内石積み



第11図 石垣29



第12図 石垣29

図5 小倉城御厩跡の石垣28、29 (『小倉城跡』2)



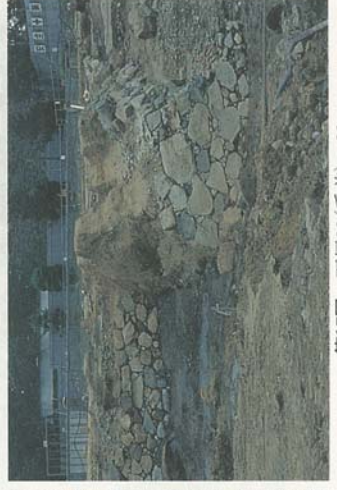
第14図 石垣25



第15図 石垣24(左)・25



第16図 石垣24(左)・25・28(右手前)



第17図 石垣22(手前)・23

図6 小倉城御厩跡の石垣22～26 (『小倉城跡』2)



金箔押鬼瓦(小倉城跡) 現高22.5cm



金箔押鬼瓦(小倉城跡) 現高18.0cm

図7 小倉城跡出土の金箔瓦

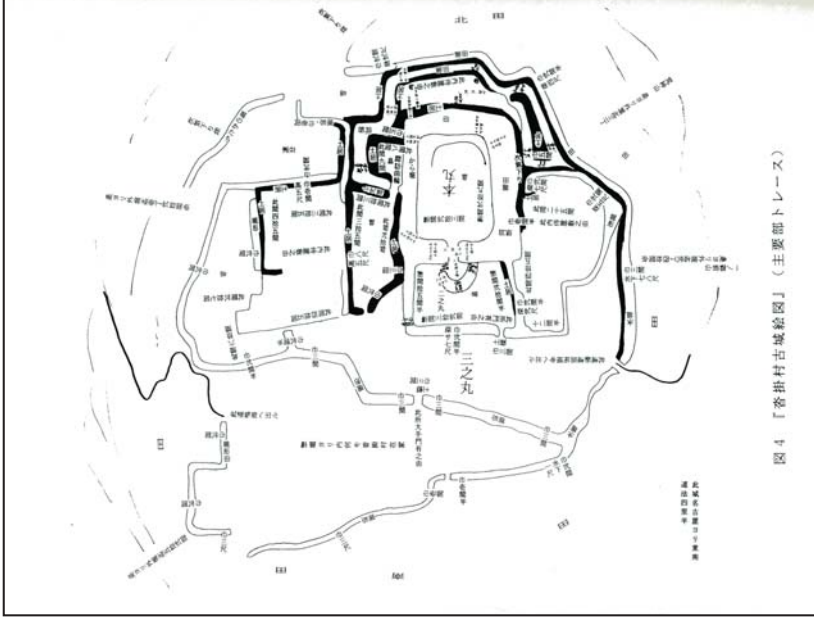


図9 香掛城跡
原図は逢左文庫 所蔵
高田徹氏のトレース

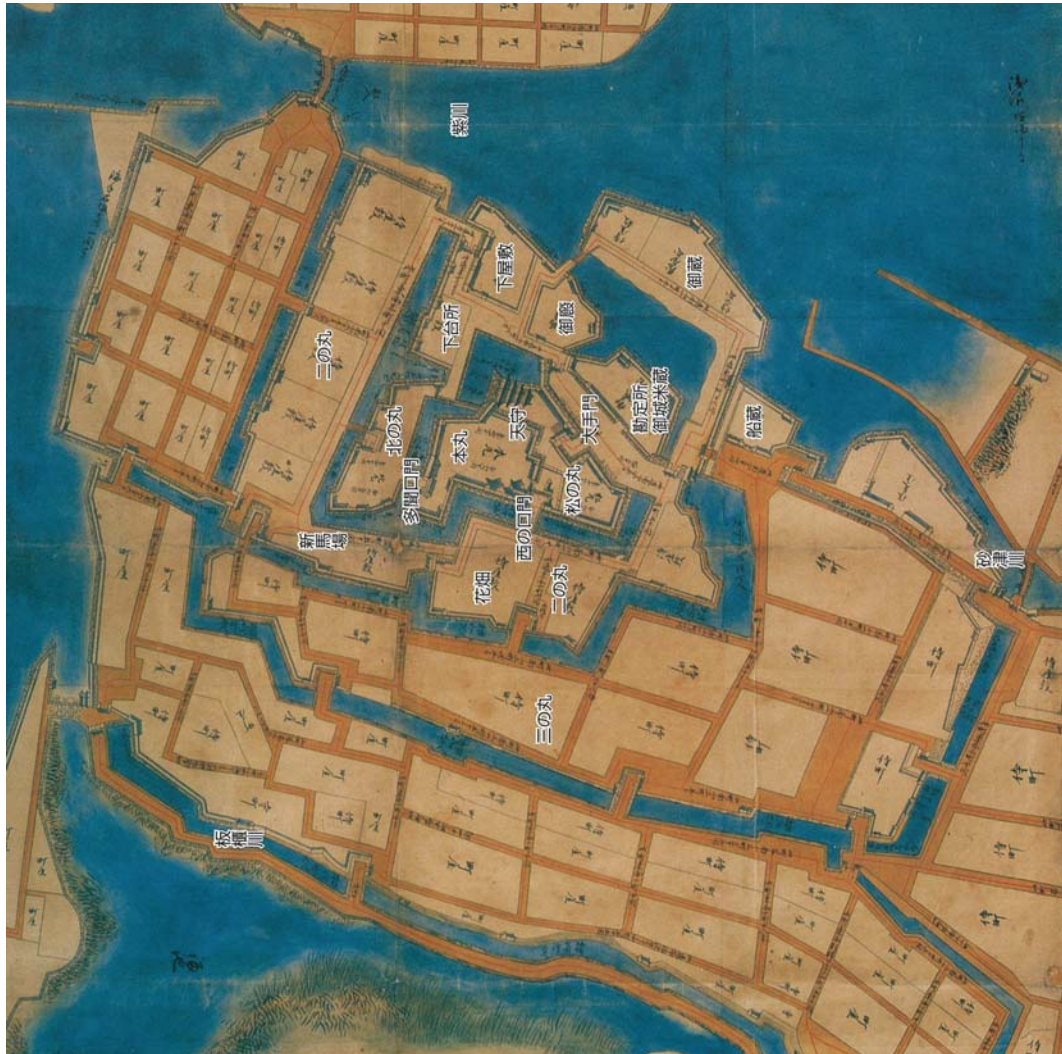
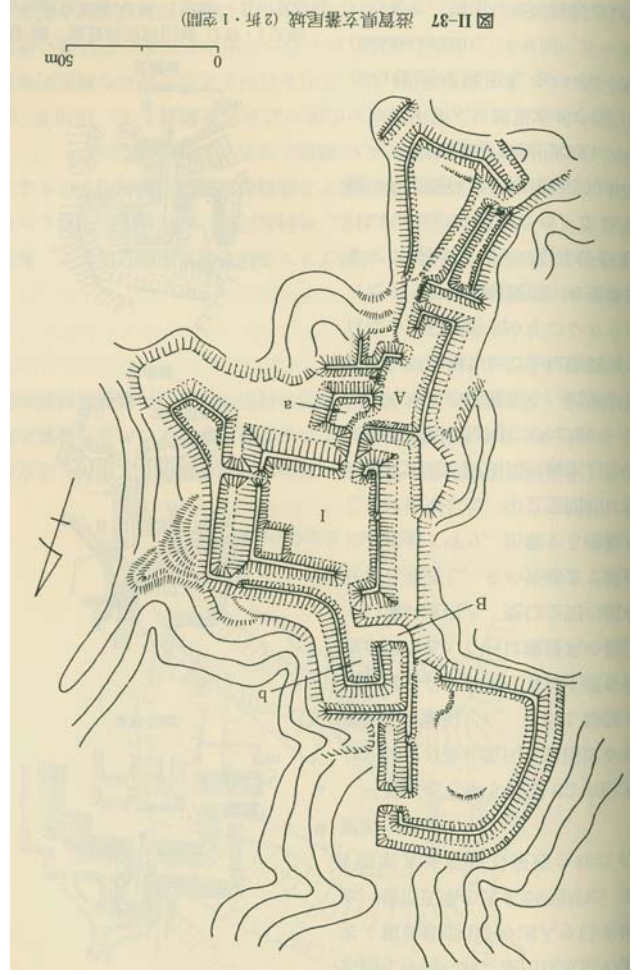


図8 小倉城主要部

図10 内中尾(玄蕃尾)城跡
千田嘉博：調査作図



图12 筑後柳川城跡

(旧立花家史料、柳川古文書館 収蔵)



图11 会津若松城跡

(福島県立博物館 所蔵)

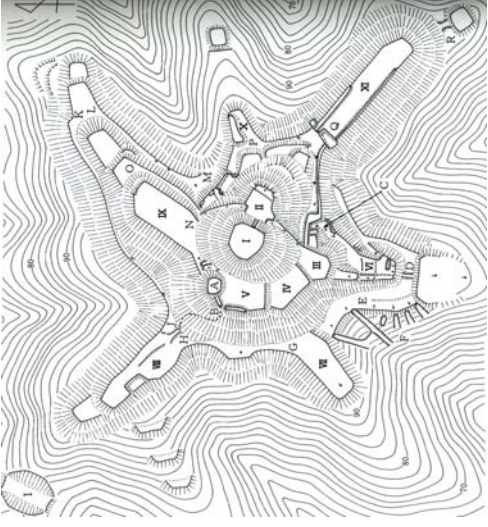
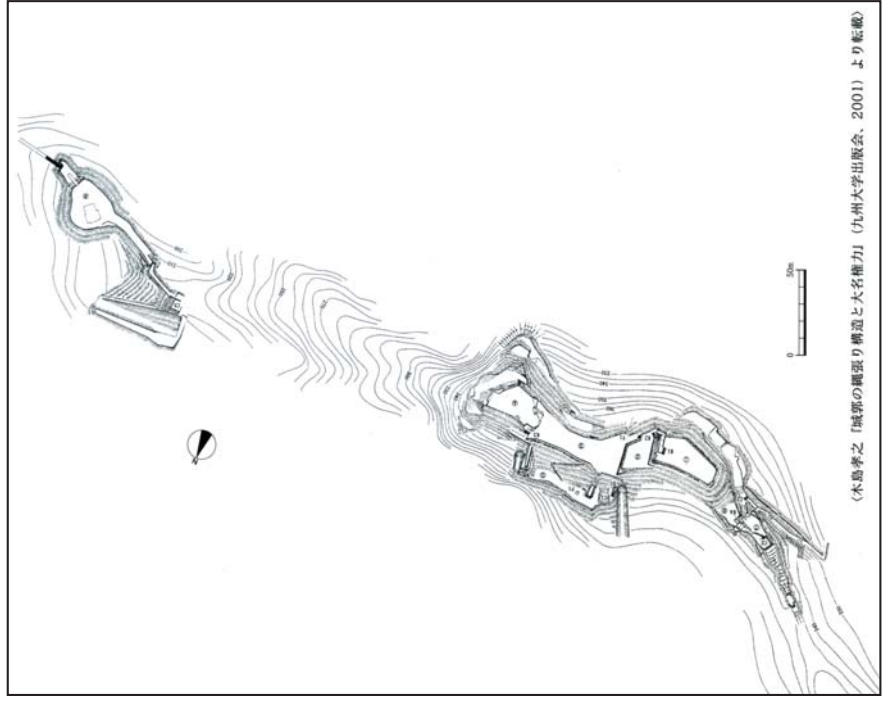


图14 丹後安良城跡



(木島孝之「城郭の調査と大名権力」(九州大学出版会、2001)より転載)

图15 豊前一戸城跡
(木島孝之：調査作図)



图13 丹後宮津城図
(京極氏時代)

第48回福岡県地方史研究協議大会「福岡県の近世城郭3 豊前の部」

中津城 — 黒田官兵衛時代の姿はどこまで追えるのか—

九州大学人間環境学研究院都市建築学部門
建築史研究室 木島孝之

【1】1980年代以降の城郭瓦・城郭石垣の研究における「縄張り研究」登場の意義

- 瓦、陶磁器、石垣の実年代を推定する際、製品の「型式編年案」のみに依拠するのが極めて危険であることを指摘した。
 - 城のどの部分に、どのような分布で確認できるのか、他の同時代城郭との比較検討した場合、どこまで実年代を絞り込めるのかという視点を勘案する必要性を説いた。
 - 当然といえば当然であるが、実は、この当然のことが殆ど実践できていない現状が多々見受けられる。
(例) 角牟礼城石垣・・・朝鮮出兵期の毛利高政期の石垣として、豊臣期の貴重な城郭石垣の事例である史的価値が評価されて 2005 年に国指定史跡となった。しかし実は、他の城郭との縄張り、石垣の比較、文書・絵図の再検討を行った結果、慶長 6 年 9 月以降の来島康親期の構築の可能性が極めて高い。
木島孝之「角牟礼城高石垣-毛利高政期構築説を問う」(『城館史科学』第 6 号, 城館史科学会, 2008 年)
- ⇒ 縄張り研究の視点を勘案した城郭瓦・城郭石垣研究の再検証の必要性
本日の検証材料— 中津市歴史民俗資料館蔵「黒田如水縄張 中津城図」の実年代と信憑性。
中津城本丸南西面石垣の実年代。

【2】中津城に関する今日の通説と論拠

- 通説①：発掘調査で確認された本丸南西面石垣（ツ・テ・ト・ナ）は、両端部・拡幅部を除けば、天正期の黒田孝高期（天正 15 年入国）のものである。
- ⇒ 本丸南西面石垣は、九州で最初の織豊系石垣（近世城郭石垣）である。
- 通説②：中津市歴史民俗資料館蔵「黒田如水縄張 中津城図」は、黒田孝高期からさほど時期を経ずして作製されたもので、当期の姿をおおよそ正確に捉えている
- ⇒ 黒田期に長方形だった城の形状が細川期に三角形に改変。

〔通説①の論拠〕

- ・本丸南西面石垣（ツ・テ・ト・ナ）の石材は野面石・荒割石で矢穴割技法を用いておらず、隅角部の処理も整った算木積みと なっていない — 天正後期の「古式」な「穴太積み」技法である。
- ・本丸南西面石垣の第 1 期石垣の雁木（階段）の登り口に敷き詰められている瓦が黒田期、第 1 期石垣の櫓台に共伴する唐津焼が岸岳系唐津第 I 期（1580 年代～1600 年代）である。
- ・本丸南西面石垣の前面の堀から金箔瓦や桐紋瓦、肥前名護屋城の瓦と同範の瓦が出土している。
- ・本丸南西面石垣・堀の形状が、中津市歴史民俗資料館蔵「黒田期中津城図（仮称）」とほぼ一致する。

〔通説②の論拠〕

- ・本丸南西面石垣・堀の形状がおおよそ中津市歴史民俗資料館蔵「黒田如水縄張 中津城図」と一致する。
- ・本丸北東面石垣・堀と二ノ丸北虎口周りの石垣・堀の形状が、おおよそ「黒田如水縄張 中津城図」と一致する — 通説①の論拠と補完関係

【3】通説の論拠の問題点

〔通説①の論拠の問題点〕

- 野面石・荒割石で矢穴割技法を用いておらず、間詰め石を多用し、隅角部の処理も整った算木積みとなっていない、天正後期段階の技術・技法を思わせる石垣は、型的にみれば確かに「古式」である。しかしながら、個々の事例についてみた場合、安易に「古式」^{イコール}「実年代が古い」とは判断できない。天正後期～慶長期の織豊・近世城郭の確立期には、技術・技法の「逆転的現象」が少なからず見られるなど、技術・技法には領国間だけに限らず、同領内でも大きな偏差がある。
 - 肥前名護屋城石垣と福岡城（長政期：玄武岩部分）石垣
 - …両城ともに海岸部採取の同質の玄武岩を使用しながら、普請時期が10年ほど先行する名護屋城は矢穴割肌石材を使用。福岡城は野面・荒割石を使用。しかも黒田孝高は名護屋城の石垣普請奉行として参画。福岡城石垣はかなり「古式」で、型式だけでみれば天正後期とみても何ら違和感はない。
 - 福岡城石垣（長政期：玄武岩部分）と小石原城（黒田六端城）石垣…小石原城は矢穴割肌石材、算木積み
 - そもそも、「穴太積み」と呼称された特定の技術・技法は歴史上、実在しない。
 - 岸岳系唐津第I期（創始期唐津焼）の創業は、慶長5年末頃～同6年初旬頃が極めて有力。
 - 「唐津編年案」の誤り…標準遺跡である岸嶽城の実年代、大坂城三ノ丸の実年代・範囲の誤認が明白。唐津焼は、慶長7年2月頃の段階では未だ流通していない。流通し始めるのは同7年半ば以降。
 - 木島孝之「唐津焼創始時期-1580年代説-を問う～岸嶽城の縄張り構造の解明を通して」（『韓国の倭城と壬辰倭乱』、岩田書院、2004年）
 - 本丸南西面第1期石垣に共伴する唐津焼が着床というならば、同石垣は細川期以降の構築になる。
 - 中津城南西面石垣テ・ト・ナに水抜穴が各1箇所。関ヶ原戦前の事例は肥前名護屋城東出丸1箇所のみ。一方、細川期の築造と考えられる石垣には水抜穴：石垣カ…1箇所、石垣キ…2箇所 — 共通性
 - 関ヶ原戦後の城郭では支城レベルでも桐紋瓦が広く使われるようになる。
 - 金箔瓦は関ヶ原戦後も使われる — 仙台城、小高城、江美城、江戸大名屋敷など
 - 肥前名護屋城と同範は、関ヶ原戦後に構築された寺沢領（唐津）岸岳城・獅子ヶ城でも確認できる。
 - 織豊系瓦の場合、製瓦技法のみで実年代を10～20年を絞り込むのは困難。
 - …コビキA技法は慶長後期でも存続 — 同領内でもコビキA、B技法は並存（益富城、鷹取城、福岡城）。
 - 古式な瓦当文様と最新のコビキ技法の組み合わせが少なからずみられる — 益富城
- ⇒ 縄張り「石垣の形態編年案」・「陶磁器編年案」・「瓦編年編年案」を杓子定規に用いて、本丸南西面石垣の実年代を推断している現行の評価は極めて危険

〔通説②の論拠の問題点〕

- 中津市歴史民俗資料館蔵「黒田如水縄張 中津城図」は、描写内容や作図方法からみて、有沢永貞編纂『諸国居城之図』（17世紀晩期に成立）、山県大弐編纂『主図合結記』（18世紀後半成立）と同系の「軍学図」であることは明らかで、議論の余地はない。特に、『諸国居城之図』と類似 ⇒ この系統の図の転写図。『諸国居城之図』・『主図合結記』等の収録城図は、実際の縄張りの姿を描いた収集図（元図）を下図にして、軍学的関心によってデフォルメ・改変した図であり、写實的に描くことは二義的関心事。
 - ⇒ 細川忠興期または小笠原期中津城図（元図）が『諸国居城之図』の編纂でデフォルメ・改変を施され、この系統の図が幾度かの転写を経たものが中津市歴史民俗資料館蔵「黒田如水縄張 中津城図」であることはまず間違いない — 中津市歴史民俗資料館蔵図は転写の過程で、本丸水門周りを誤写（水堀を描く）。
 - ⇒ 中津市歴史民俗資料館蔵「黒田如水縄張 中津城図」は、細川忠興期または小笠原期の原図を操作・改変して作製された「軍学図」であり、これを基に黒田期中津城の縄張りを推定するのは全くの誤り。
 - 今日の中津城の発掘調査と結果分析は同絵図に引き摺られているところがあり、早急に見直しが必要。

【4】黒田期の縄張りはどこまで追えるのか。

- 黒田期のものと考えて間違いないと思われる石垣
 - 本丸北隅周辺部分：ア、イ、エ面 …… 唐原神籠石を転用石材として多用
転用石を多用するのは「古式」な技法である — 福知山城天守台等

 - 中津城での転用石材（つまり、唐原神籠石）の分布に注目すると
 - 多用 …… ア、イ、エ面 — 本丸北隅周辺部分
 - 散見 …… ウ、オ、キ、ク、ケ、シ、ス面
 - 混入 …… コ（1個）、サ（2個）、セ（1個）、ソ（1個）、タ（2個）、チ（1個）、ツ（1個）
- 築城当初の石垣が残存する部分— 唐原神籠石を転用石材として構築した部分…ア、イ、エ
- 築城当初は本丸全体が唐原神籠石を主石材にして構築されていたのではないか。
 - その後、他の石材を用いて縄張りを幾度か大改修や補修した際に、築城当初の縄張りに用いられていた唐原神籠石を再利用したことで、ウ、オ、キ～ツのような散見・混入の状態が生まれたのではないか。
- ⇒ 本丸南西面石垣（チ・ツ・テ・ト・ナ）は、唐原神籠石を主石材にして構築されていた築城当初の縄張りを大改変した時のもの— つまり、第2期以降の石垣の可能性が高い。
- 石垣アと石垣カの取り合い部をみると → 石垣カ（キも同類の石垣）は第2期以降の石垣。
 - 石垣ウ・オ・カ・キ・クの石材の「寝かせ具合」は本丸南西面石垣より弱い、荒割石・野面石を間詰め石を多用して積む技法は、やはり、「古式」である。
 - 本丸南西面石垣（ツ・テ・ト・ナ）、三ノ丸西面本丸側寄り石垣（ツ・テ・ト・ナと同技法）は、石垣ウ・オ・カ・キ・クに先行する石垣か否か …… なんともいえない
 - ⇒ 本丸南西面石垣は、第3期以降の石垣の可能性もある。
 - …… 矢穴割りをしない荒割石・自然石を間詰め石を多用しながら寝かせて積む技法は、確かに「古式」ではあるが、寛永元年（1624）構築の秋月城の築石部分でも見受けられることから、「石垣の形態編年案」の観点だけをもって安直に古い実年代を与えることはできない。

本丸南西面石垣（ツ・テ・ト・ナ）は、第2期あるいは第3期石垣である可能性が高い。

構築時期…黒田期後期に収まる可能性はあるが、細川忠興期（慶長6年<1601>～同7年<1602>）、興秋期（同7年<1602>～同10年<1605>）、忠利期（同10年<1605>～元和6年<1620>）、忠興再入城時（元和6年）の何れかである可能性が十分に考え得る。軽々に黒田期の遺構と推断するのは危険。

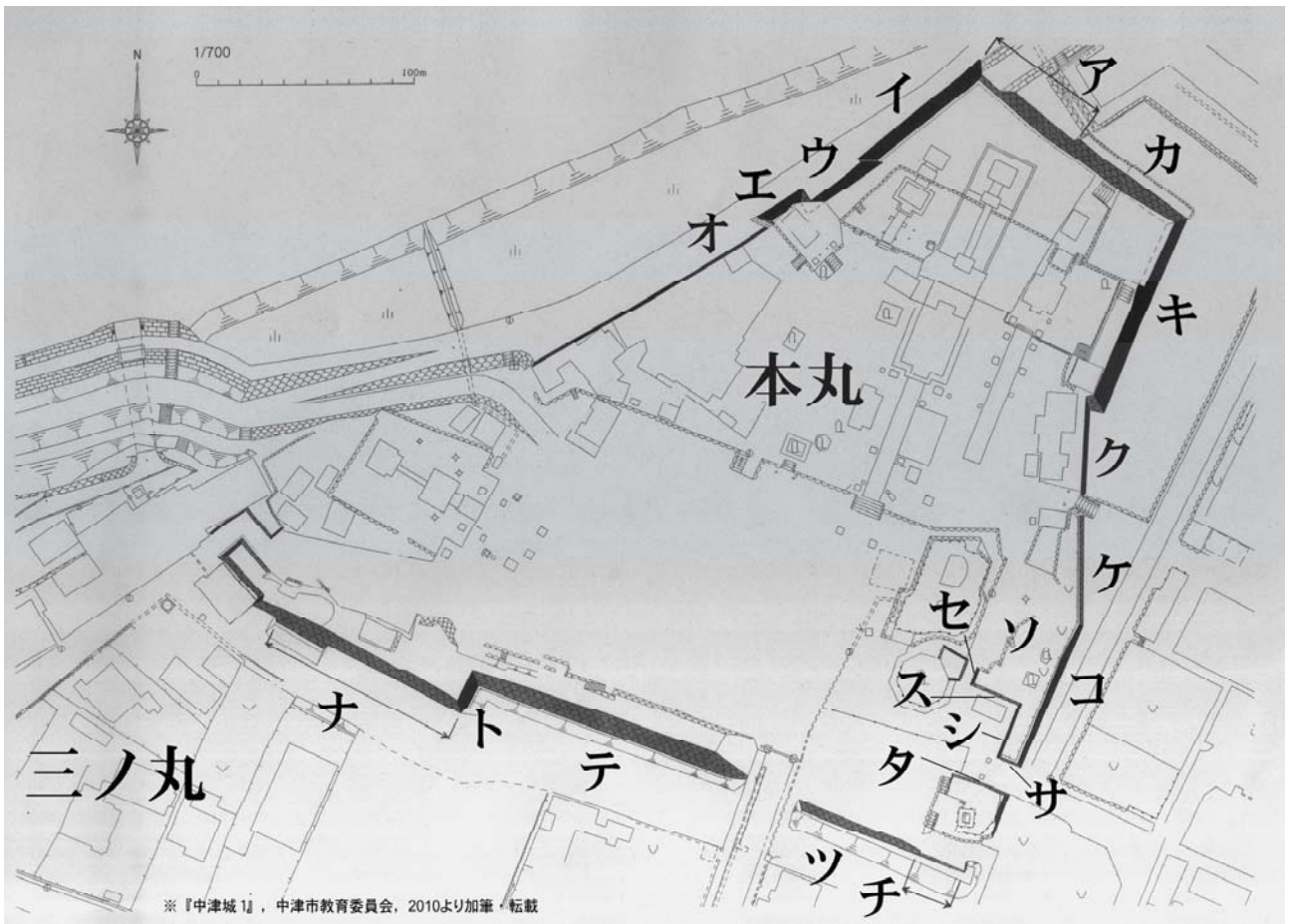
— 関ヶ原戦後の織豊取立大封大名の本城・支城では、前領主時代の縄張りを大々的に改修するのが一般的（例）宇土城・麦島城・愛東寺城 — 小西期の痕跡がわからないまでに加藤氏が大改修。

※麦島城の二段石垣については、加藤期の中での拡張改修か、あるいは犬走の可能性が高い。

すると ⇒ 中津城本丸南西面の長大な塁線の形状が小笠原期（寛永9年<1632>～享保2年<1717>）の姿を描いた絵図と一致することは、逆に、同所が黒田期の築造でないことの証左とみることも可能。

【5】まとめ

- 中津市歴史民俗資料館蔵「黒田如水縄張 中津城図」は17世紀晚期以降の軍学図で、写実性に信はない。
- 黒田期の姿を残す石垣はア・イ・エ部分であり、本丸南西面石垣（ツ・テ・ト・ナ）は第2期か第3期石垣の可能性が極めて高い。その構築時期は細川忠興・興秋期か忠利入城時の可能性が高いと思われる。
- 縄張りを勘案せずに、石垣・瓦・陶磁器の形態編年案を杓子定規に用いた遺跡の実年代判定は大変危険。



中津城本丸現存石垣



←
ナ

⇒
テ



←
イ

⇒
ア





←
カ



⇒
ア



←
ア



⇒
イ



←
キ



⇒
ク

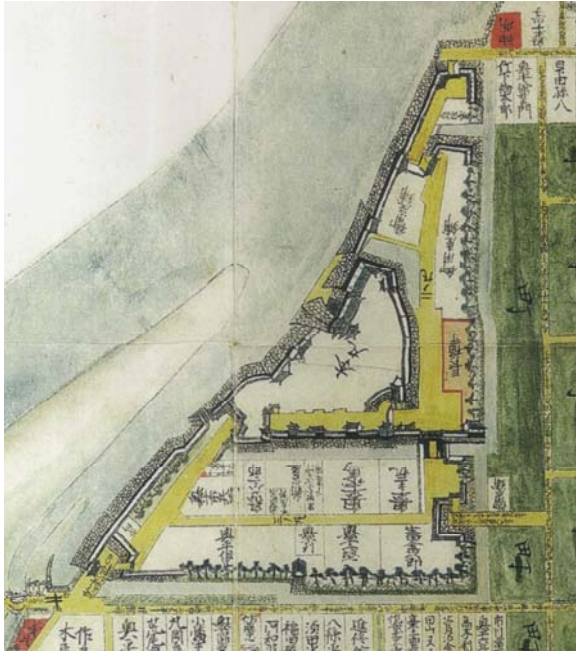


←
テ



⇒
オ

「軍学図」の成立過程

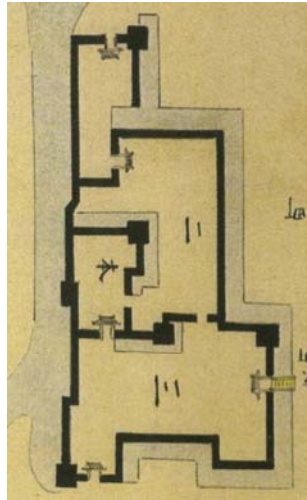


奥平期中津城図（吉本家絵図 個人像）

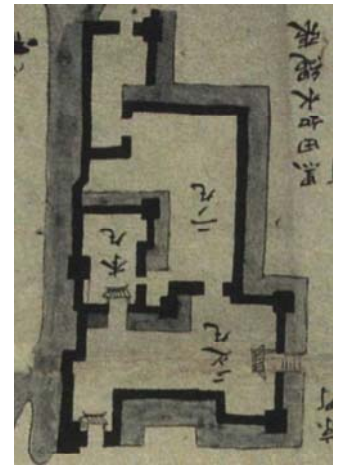
⇒ 正確な元図を

デフォルメ、改変

⇒ 幾度もの転写を経る中で誤写 ※本丸南西の堀



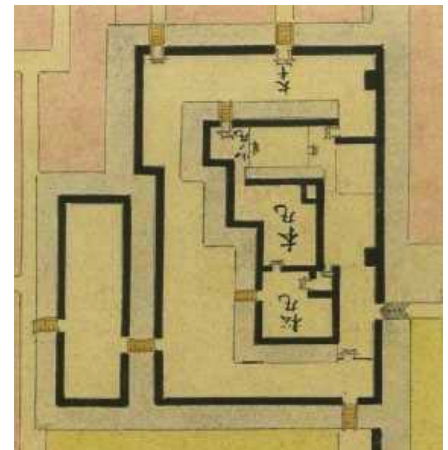
尊経閣文庫『諸国居城之図』中津城図



中津市歴史民俗資料館蔵『黒田如水縄張 中津城図』

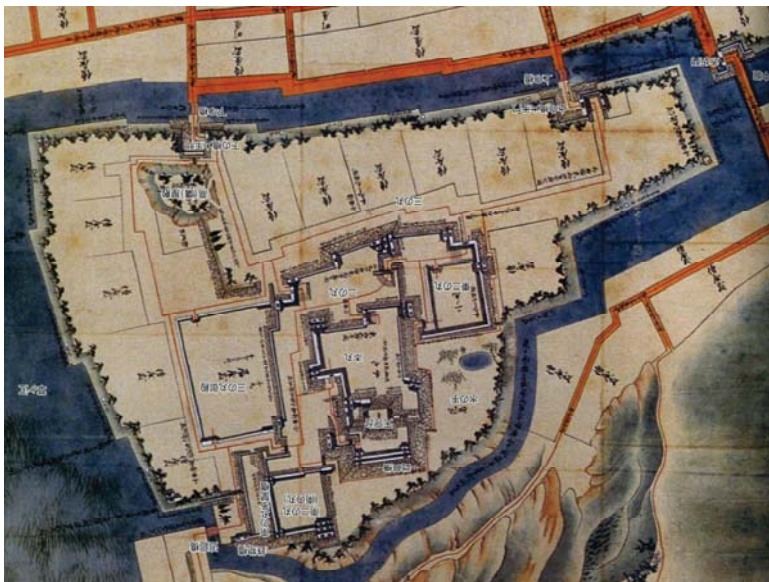


⇒ 正確な元図を
デフォルメ
改変

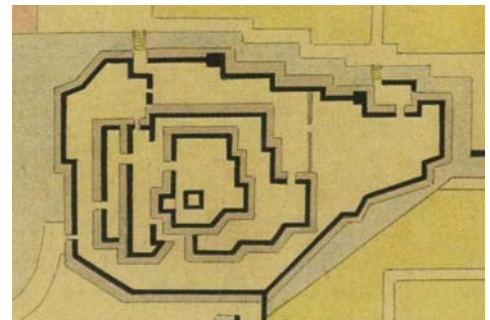


尊経閣文庫『諸国居城之図』小倉城図

『正保絵図』小倉城図（内閣文庫）



⇒ 正確な元図をデフォルメ、改変



尊経閣文庫『諸国居城之図』福岡城図

『正保絵図（控図）』福岡城図（福岡市博物館蔵）

平成26年7月15日

第48回 福岡県地方史研究協議大会

編集兼発行 福岡県立図書館郷土資料課